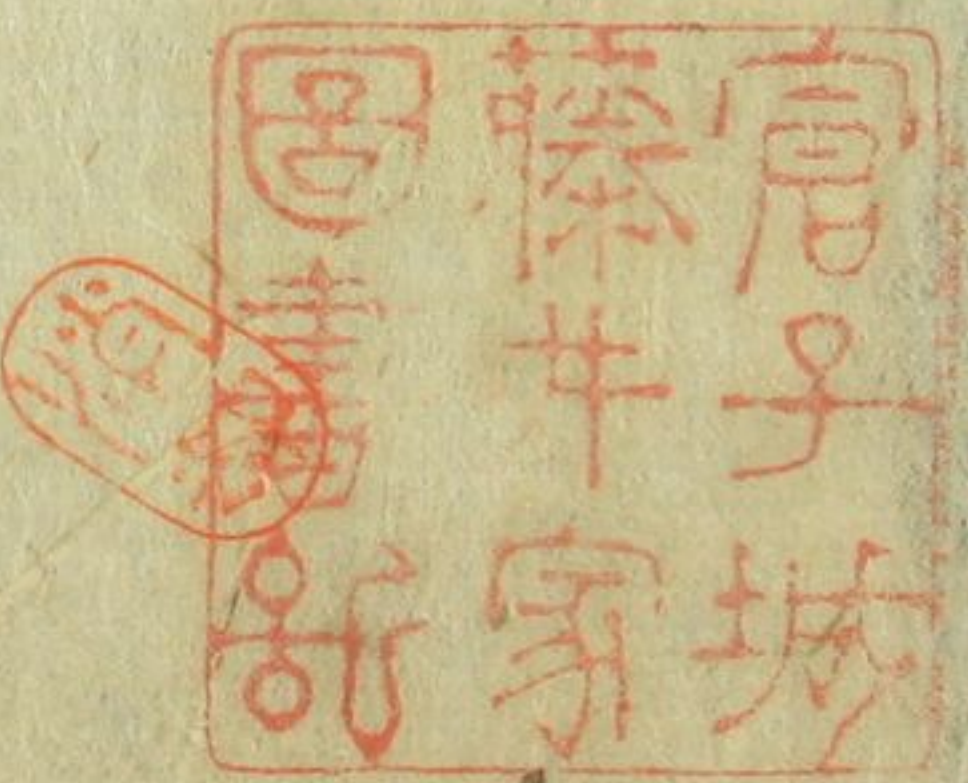




⑤ 柞 匡 衡 四 代 一 ありて 中 納 言
 たり 帥 一 ありて 江 帥 一 ありて 才 智 先 祖 一 ありて
 宇 治 園 白 平 宅 院 一 と 建 立 一 乃 所 地 形 一 の 一 ありて 志
 多 一 ありて 舎 一 ありて 土 湯 門 一 ありて 右 府 一 ありて 相 傳 一 ありて
 乃 北 向 一 の 寺 一 や 竹 一 ありて 向 一 ありて 其 後 一 ありて 大 門
 一 ありて 冠 者 一 ありて 者 一 ありて 車 一 ありて 尾 一 ありて 具 一 ありて
 一 ありて 終 一 ありて 終 一 ありて 終 一 ありて 終 一 ありて 終 一 ありて
 一 ありて 終 一 ありて 終 一 ありて 終 一 ありて 終 一 ありて 終 一 ありて





〆ていゝく天竺の那葉院寺戒賢禪師の遺言
 震旦の西明寺山剛法師の道場日本より六波
 羅密寺堂也上人の建立みるこれ山面也とて
 くりき活版とて清感ありとあり
 江州のいまごりてつた相人ちりきり清隆の因縁
 寺のつた院の清徳とてまわり申お徳寺に
 へく念痛の向なりこれに清徳と縁よとてあ
 りと清子なつてとてこれに清徳と縁清徳あり
 寺のつた院の清徳とてまわり申お徳寺に
 へく念痛の向なりこれに清徳と縁よとてあ
 りと清子なつてとてこれに清徳と縁清徳あり

美玉よりしりしりけりや

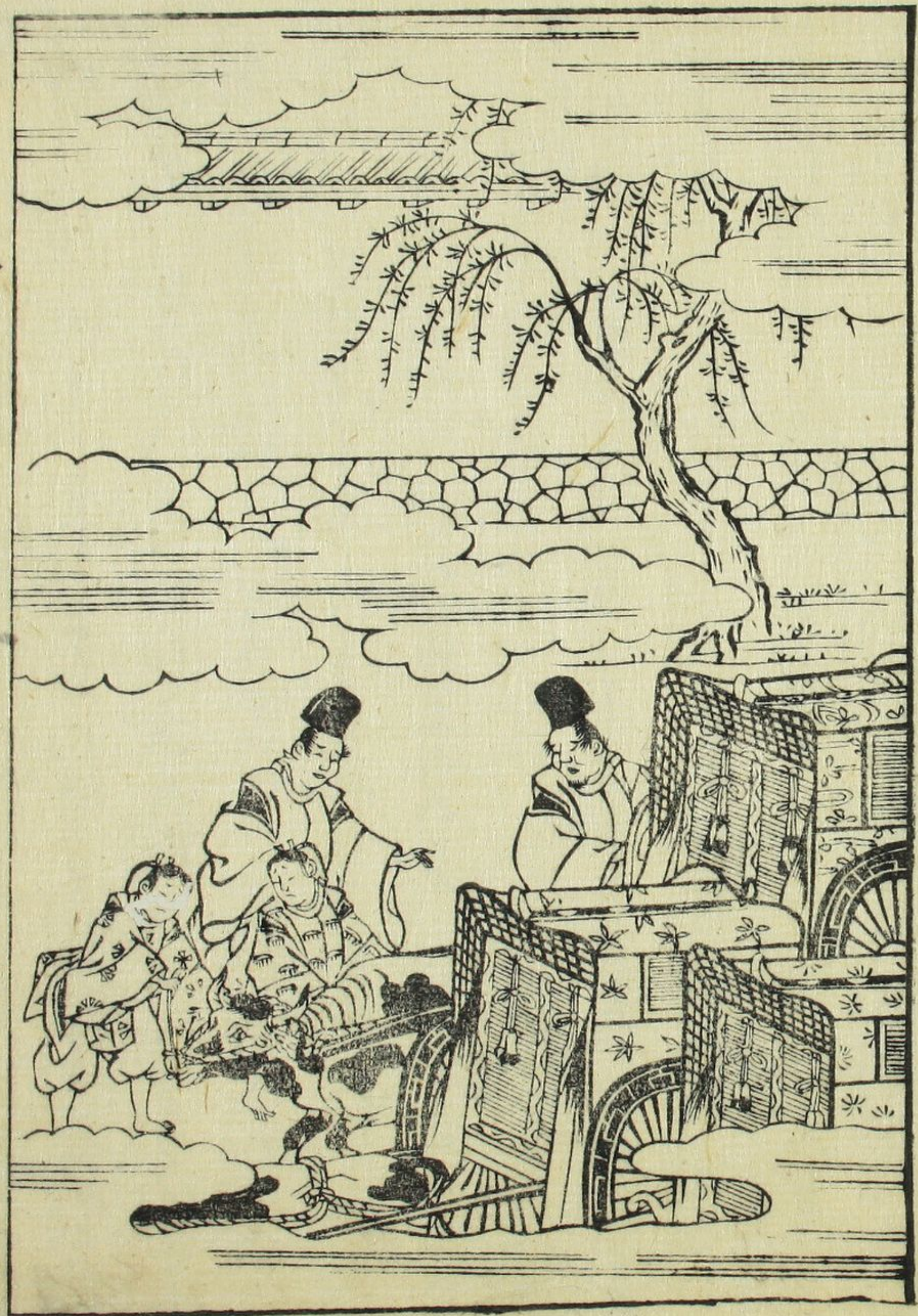
①野宮奇合判者ハ源順よりより女房とあり
のせられハ男方より

花の色如蒸粟俗呼為女郎ト名戲欲契ラント借
老恐惡衰翁首似霜

と順がめろふよりてとありやいと面白く同難を
とれやれくめりも一粟如蒸粟ハいふもやまの
うぬゆりめかゆるぬ魏文帝與鍾大理書詞書云

美玉白如截肪（時）黑赤擬雞冠（時）黄作蒸粟

とあるはるるんをせりる事有とありていふがれ
ととる多奇の判ハ其才覺ハさる事ありてあるく
せれも才をさる判人ハととる也とて後頼朝ハ十
徳をさる人の判者ハありはととる事あり
言圓信家の奇合判後頼朝判さるは若校阿雲
隆源（大宮元正の孫）依基（源朝綱の子）後をさるのくねる事あり
とて書付さるる事ありやとて世のあはれ之のすく
人より用らるる事あり也十徳ハいせれめがえ程姓
貴和奇才學ハ新古今是以下案也



一乗東洞院いっしやうとういんの巻まき一室いつしつの翁おきなが見物けんぶつとんずる所也
 共ともしうしう一いつ室しつの翁おきなの舎人やうにんかりりり翁おきな實まことをを家けの日ひ
 くやゆりえあひくんとやゆれをせむらう
 一乗東洞院いっしやうとういんの巻まき一室いつしつの翁おきなが見物けんぶつとんずる所也
 共ともしうしう一いつ室しつの翁おきなの舎人やうにんかりりり翁おきな實まことをを家けの日ひ
 くやゆりえあひくんとやゆれをせむらう
 一乗東洞院いっしやうとういんの巻まき一室いつしつの翁おきなが見物けんぶつとんずる所也
 共ともしうしう一いつ室しつの翁おきなの舎人やうにんかりりり翁おきな實まことをを家けの日ひ
 くやゆりえあひくんとやゆれをせむらう

ラミしも
水干ノコトヲ
云ナリ

人よりづかづかといふれとありきよりきりきりされ人
りの義ちよめが取あるといふは陽成院物ものりらんぞきとと
まらねたる也とて人よりとらとら程より何れも此
義ありたのうみも著、高まらねたる程より何れも此
がかりけしきとて物取えたり人目とあるたり
陽成院此事とありてとて人の義取ありて院司
とて同くきとねたれは歳ハナみ成まるゝの志まより
けりぬがととと孫まとてい男れ内義司つづみ乃小侍こづみと
ありぬりていぬがわたりぬんまかりとてきり見ゆん
うい人よありとらとれぬぐ、ゆがとてやすく見ゆん

きりぬれをいぬとてけりきり院の清後きんとんより
い書いぬばとやとれはさもありまるとて中なめ法はわくと
ゆりたり是肝きんとたれぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬと
えたりけりとせありけきととて人の指さ舞まいれ
ぬぬよ詞ことばとぬれと人をとぬれぬとぬれぬとぬれぬと
どい戯たこのまどゆれぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬと
の中なかにありぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬと
ぬれぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬと
方かたよりありぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬと
ぬれぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬとぬれぬと

平中やりの中ねよのめはねと弟三人のりくはぶ
中ねのりくゆい也

③大中大後宣又頼基めりてりてりてりてり
入道或部ゆきの清子白のりくはねりてりてり
教書八紙三字と大身十八字

子年ゆてりてりてりてりてりてりてりてり
りてりてりてりてりてりてりてりてりてり
いざりの昇殿とゆりてりてりてりてりてり
ふ奇ねもしりてりてりてりてりてりてり

東より大宮の子白めりてりてりてりてり
りてりてりてりてりてりてりてりてり
たごのりてりてりてりてりてり

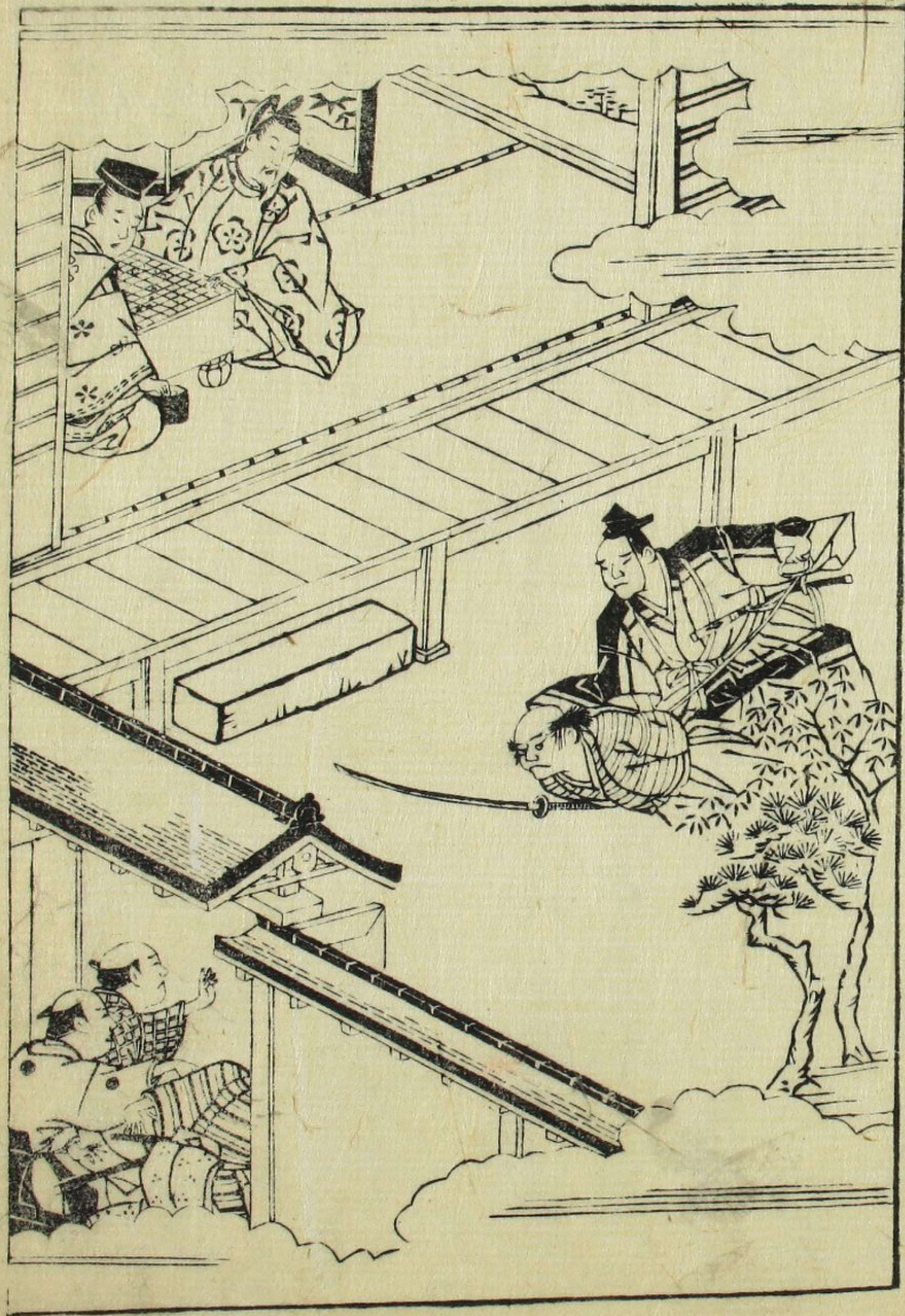
④後一乗院の清河清畧堂のゆ林もれ公ねの拍
子りてりてりてりてりてりてりてりてり
てりてりてりてりてりてりてりてりてり
りてりてりてりてりてりてりてりてり
やがて拍子をりてりてりてりてりてり
てりてりてりてりてりてりてりてり

此奉りゆは法住とていふれ多終に公奉りた道とて
作らばそのおとく用念仕りてせざるられたる
りかしくもより定頼初念とていれたるに世也

①法堂入道東に東の法前法造とていれ有田
車好しけるも泉の透廊南へあぐりあぐり中
のやど一間と長押とていざりたる殿下はたどて
きどくもぞ下とていれせよつれやと作とていれど
何とていれ中よりいれせよとて止めたり然間と東門院
立后のねねく入門のたれ世と長押あぶ其ねひ
かぶとていれし法興中よりいれせよとていれ有田

り作らばおとくいけくろいりせるといれ殿下法
後ど中りけとて指張とて上長押とて中りたる
ふし其後者ぐとてねどて法興のすはとけりて
上長押とていざりたる用念法とて有田の伴大
納言後身也伊豆國より大細言教とていれ有田
か容真といれせよとて又若男後焉といれせよ
いぬとていれせよとていれせよとていれせよ

②宇治殿が事れられた後賢とていれ感よわらるる
遊遊といれせよとていれせよとていれせよ
後賢といれせよとていれせよとていれせよ



二〇十一

縁え動どうとて我わがめしといひて下人しもをくぐりて中門ちゆうもん
の廊下ろうげの車くるまをとてころりた人ひとといふころりたるまはつきの
心こころいつくば觸ふ縁えのまはへを自後よりごでしり
④こ義家よしか初長はつぢやう陸奥前司むつみ前司乃以常城川右府のよはゆ
ままく團い基ぢ松しょうううららをらりいつい小新こしん色しよ一人ひとりづづりりをを相
^{具一}ままつつららりりととああかかととおおてて中門ちゆうもんの心こころのああききなな松
ううららりり或日あるひ寢殿しんでんして團基いぢ松しょう打向うちむか遊入あそびいれのの紀
人ひと乃のはなはなとて南殿なんでんとけしとててささらら松しょうおお司し義家よしかああづづら
がゆゆららりりととゆゆららりりといいははるる松しょうおお入いれととれれるるととれればば果
ははりりといいままりりととよよちちれれといいままりりとと新しん色しよハハ様さまととの

ねらうたはゆりもぬれりし此東はゆてつら中他よ
とゆりて刀成たぐりて靴色これとこも同を
の小あよひくしとれりし即等四の十人ぶりのあまて件
の犯人を相異してかたさうぬらうらうは武士等
しるしをくさうらうと

⑤平孝院信正のまゝ出世の貴女にあらはせられ
ちりむせしりみどりのうらり鳥ねは清浄持信を
常より内裡よりみつまでちり日清遊あらしり
花園たは長弁にむね室相中ね室捕筆樂人
河之富女房利與うま入清也又長共人中勢が捕

忠家と名めあつて筆葉をけりまらる平調大
合個のうらみけくされり千載乃一遇なり
やみそ中務りり此信正并は性考座主仁實清
前より清遊のあつた程よ玄象れと結されりけりあ
信正ゆとこりより琵琶乃結成取あくるりなれば大
たこれとみて終末のあつたごとく人々ゆりあひり
百字多法會大井川み幸は日泉大將の烏帽子お
しるりるる小女は信正の衣箱より取あつる人
しるしをくさうらうと

⑥近江の赤松は氏親の定家より内は赤松とて一

双しんをれりるのそり我もくせらるゝあて人多かれど
 いづれも此二人よひ及びぶらりありあつた後系極敷子商
 心を免していせりり高まるも多くはゆる中れりら
 まりりせりれらあめ押のん中りあつたのまゝにのゝんと
 所きりひ者らるらにづれれ分るるりらやう者らり
 といひぬくやあはるめ同きまひたれは懐よりあやう
 がらみ中して中りくあかふるは清後ぞれれれだ
 明はまのれのはれらるるべくあつて月乃れまのそり
 やうなうらるる是の民部らの奇也るひてくは清後
 づりまづといひらるるぞらあらんもあより面白くてうら

ありこれきりるらあせり是あど開きらぬらと
 きぐいありける

⑤ 清堂入道殿つゝおしけるは神内大老は清車
 一系果して一系核段のりくねらるるふ牛一乃
 色物して辻のうきををりやぶ紙面向ありままりり
 くれは此牛のつらんどこ色物らあつたに佳しごと向
 てもいくれは神殿紙蘭よ人乃誦経りあつたりら
 をけしんとりてゆる也と戸給めくは事しきとくぬ
 けりとして清後費のそら紙とりて皆もら紙綴り
 ておりて人乃門の唐舟あはは居きとせとあひらり

樂塩
落楳

夕れに帥殿すうどののあがりておりのりゆらしたる由ゆ越こ度たもや

⑧ 堀川院ほりがわのいん浄河じやうが勅解ちやくげ由ゆ次官じくわん明宗めいしゆとてついできき留りう候こう

者ものきりゆしきふとこれの人ひと也なり院いん留りうまこしきさかん

とて免めんりさうり何なに帝ていれ浄じやう帝ていと思おもふは臆おそりてま

好このとてえあうざうり本ほん意いあしどこそ相あひあま

くろ女房にようぼうは傳つたへ終しまり終しまりはなれりゆらぬよびてぬ

うせよゆきまままじく作つくまこれに月つきのよかこゝして

驚おどりさうせり女房にようぼうのまこととよよいけりうこれ

きてゆもふさふさふれり世よもいさぐりてきり

つとらりつらや感かんり堪たさをやんりゆと目め来きとふ

こはさふり免めんりつれどもゆらまていゆがくゆさ

いこちせりてふこれと作つくおさねりゆふさの浄じやう門もんのこ

こく免めんりけりよゆさうらま地ちは臆おそりてさりだりゆ

り縁えんより落おり安樂あんらく塩しんといふ異か名なをつれよき

つも昔むかし秦しん舞ぶ陽やうが始はじり皇こう帝ていと膽たんまりて色いろあまど身み

ふもいさりけりい送おくをけりえさうりさうり扱あた

明宗めいしゆ何なによよりそゆらわつてさうりせゆら

天てん徳とく寺じ合がは性せい雅や三位さんい徳とく師しつとむらにあらま

よえあやまりて色いろあまど怒いかりあういさうよりさうり

乃な記きりりんりさうりゆらぬり上かみ古このゆら人ひともか

乃どぬまきなり

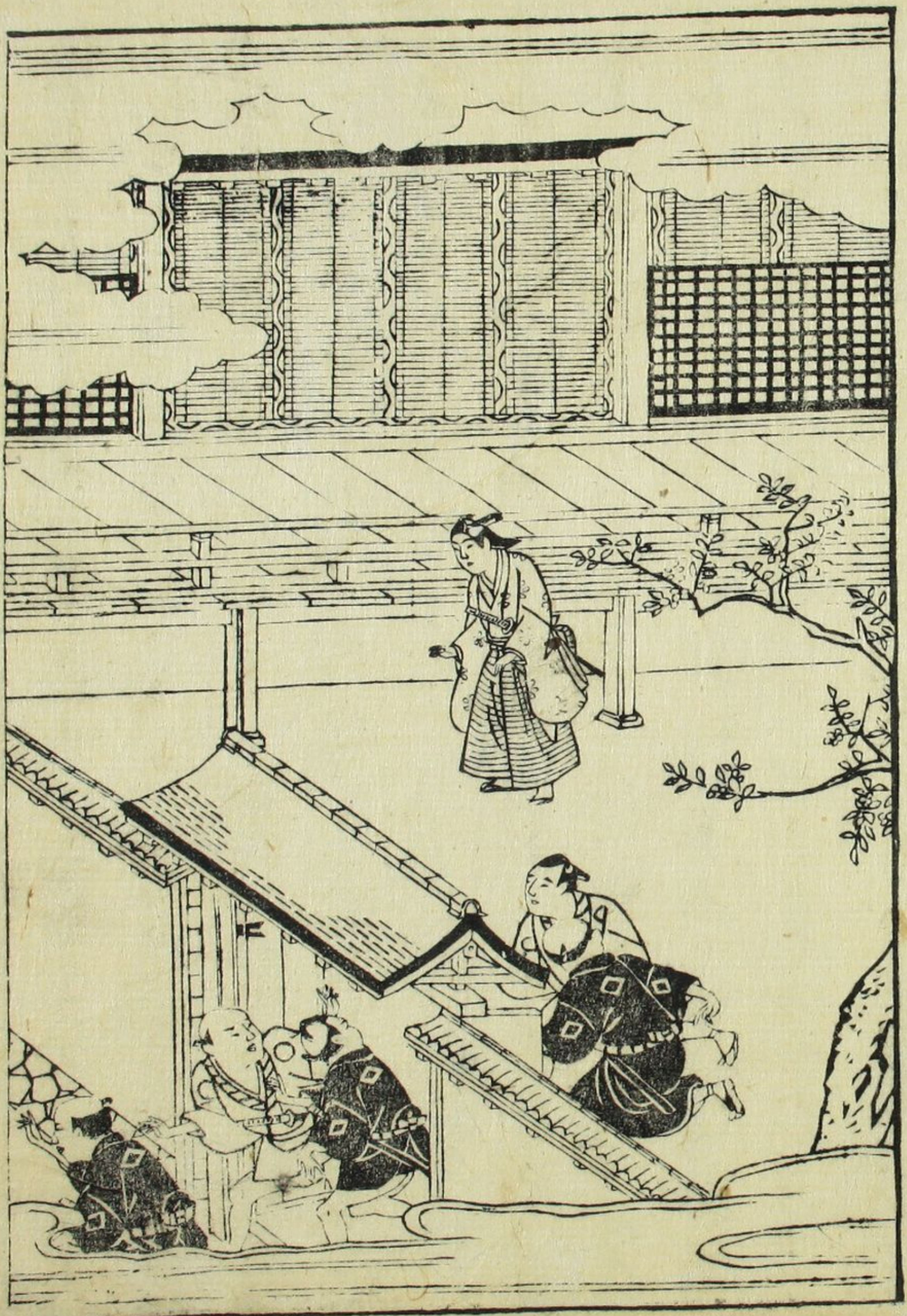
⑧ 楊梅大納言歌雜のついでよりのみどき言先はぞ
あふいり神無月ころ或はあまふりてみるの
あはれ女房をしらと物ごりてし終るふまづれら
らとけきば供ちる雑色とよびて車のあつらへ
まき入よこのあふいりる松車軸とらや中をうらや
とてみとれ内しひのれり或女房のゆえんあぐ
常にありや笑ゆまげや清新のまごやこられ
けまばうのふれよこ人の薨とゆるけまらまきと
あはれとそれらうらうらおらう薨のまきあはれとま

つと通りける松入て親音あはれづてのあふいりる也
町ぬき入よれははらてわらうらとらり

⑨ 湯院の心親町殿の東向の車寄に大あつて
いもの末のり徳大寺た大長あう結くわらるる人あ
して内侍あよ見を衆よ入やありたれば其うて笑て
まご今とあればあくとりあふ毒戸のうらうら拵
あはれは木はらうかど同を結るれまごうらか
しこあつてもあつてはらと推の本よてふとりきり
くれは中ころうらあまて棹さけてあうら中り育る
いとあうあつてうらあまふらうらあう人あうあは

悔しがるそくは本の有らうしてこそせよこれとて
 尸あせしわやまにばあぬのこぞとんくふびよあてくる
 女か州ちゅう幸はあぐらちゅうらちゅうみちゅうらちゅうれちゅうのちゅうあちゅうらちゅうとちゅうぐ
 公乃すくおれやどもそけうらああり具こを
 へ高たか道みちとそといくらとや

①肥い後ご守しゅ盛せい重じゅうのの因いん防ぼうのの圓えん乃の百ひゃく姓せいおお子こちちるるとと六ろく条じょう
 右みぎ大おほ長ながのの池いけ家け人ひとよよちちりりああぐぐららややのの風かぜ乃の目め代しろりりて
 くらりそらとくらふついでゆついであついでりついでてついでかついでのついで小こ壺つぼとてあついでらついでぬついでえ
 ありこころい魂たましいわりこころいぎこころいありこころいまこころいれこころいばこころいいこころいびこころいとこころいりこころいてこころいいこころいとこころいれこころいらこころいい
 くらら孤こ京きやうよよののぢぢりぢてぢののらら供たねと具ぐして大おほ長ながのの池いけ行ゆきよ



糸イトをうとけつふ南面みなへへ梅本うめもとに大おほなるがあらぬ梅うめとん
 とそ人の供くわいの者ものをのめし一ひと孫ひ孫とわらふとさるわのや
 はとらへもこゝんをいけいりつらりも一ひと孫ひ孫つらりつらり珠たま
 のをぶつたらしもやうに逃かげみくらり其その中に童わらわ一人
 本のよふやをさうくうてと一ひと歩あひてゆくらと後あとめ
 とさうげさくもたをぬれと母ははがうてらんぬをうて
 ちうくの物をさうり小童せうどうをう供くわいの者ものをさうらつ孫
 ねくらつらりつらり入いるぬけづらりてとらんよらさうり
 うれどちめを問とまふとカカさうて某そのの者ものにさうて
 一ひと歩あひり歩あひりもさうて某そのをさうとさうと作つくられたる

いをぬりてさうてつゝ孫ひ孫に孫ひ孫のまさをゆくにせ
 せしげらつらりつらりわをいのちりくら常とこめをさ
 然しかつらり孫ひ孫をのつらりてとらめらうてとまらう
 くら作しのかの車くるま箱はこり梅うめに鳥とり二ふた羽はをうらうらひの
 鳥とり頭かぶの白しろねとるねらる一ひと節ふし事ことうをさるゑとほく
 こそ問とまふくらふはぐぐとほりてとらまはよん
 見みぬるさうらつらりつらりつらりつらりつらりつらり
 下したのちりつらり白しろ川がわ院いんよもあきらまらるはとぼ
 からつらりつらりつらりつらりつらりつらりつらりつらり
 はいふはけららつらりつらりつらりつらりつらりつらりつらり

主とぞちちのゆきも^{こころ}の^{こころ}にて格^{かぎ}みれよ^{かぎ}一^{いつ}回^{まい}あ
け^ある^るより^{より}い^いづ^づか^かい^い普^ふ賢^{けん}喜^き濟^げ乎^やの^のり^りて^て格^{かぎ}ま
そ^そい^いま^まり^りも^もし^しあ^ある^る僧^{そう}一^{いつ}人^{にん}臨^{りん}息^{そく}よ^よら^らと^との^のり^りて^て
格^{かぎ}の^の思^しが^が誦^{じゆ}し^しける^るよ^よら^らと^との^のり^りて^て格^{かぎ}ま^まに^に回^{まい}
ら^らる^るの^のち^ちと^とみ^みの^のち^ちい^いの^の絶^{つて}回^{まい}あ^ある^るよ^よら^らと^との^のり^りて^て
其^{その}臨^{りん}息^{そく}の^のち^ちと^とみ^みの^のち^ちい^いの^の絶^{つて}回^{まい}あ^ある^るよ^よら^らと^との^のり^りて^て
あ^あら^らと^との^のち^ちと^とみ^みの^のち^ちい^いの^の絶^{つて}回^{まい}あ^ある^るよ^よら^らと^との^のり^りて^て
何^{なに}い^いま^まの^のち^ちと^とみ^みの^のち^ちい^いの^の絶^{つて}回^{まい}あ^ある^るよ^よら^らと^との^のり^りて^て
中^{なか}ら^らり^りと^との^のち^ちと^とみ^みの^のち^ちい^いの^の絶^{つて}回^{まい}あ^ある^るよ^よら^らと^との^のり^りて^て
ん^んち^ちの^のち^ちと^とみ^みの^のち^ちい^いの^の絶^{つて}回^{まい}あ^ある^るよ^よら^らと^との^のり^りて^て

し^しの^のほ^ほづ^づら^らて^て妻^{つま}の^の臨^{りん}息^{そく}の^のち^ちと^とみ^みの^のち^ちい^いの^の絶^{つて}回^{まい}あ^ある^る
し^しの^のほ^ほづ^づら^らて^て妻^{つま}の^の臨^{りん}息^{そく}の^のち^ちと^とみ^みの^のち^ちい^いの^の絶^{つて}回^{まい}あ^ある^る
く^くぬ^ぬち^ちの^のち^ちと^とみ^みの^のち^ちい^いの^の絶^{つて}回^{まい}あ^ある^るよ^よら^らと^との^のり^りて^て
の^のよ^よら^らと^との^のち^ちと^とみ^みの^のち^ちい^いの^の絶^{つて}回^{まい}あ^ある^るよ^よら^らと^との^のり^りて^て
れ^れし^しの^のち^ちと^とみ^みの^のち^ちい^いの^の絶^{つて}回^{まい}あ^ある^るよ^よら^らと^との^のり^りて^て
の^のち^ちと^とみ^みの^のち^ちい^いの^の絶^{つて}回^{まい}あ^ある^るよ^よら^らと^との^のり^りて^て
そ^その^のち^ちと^とみ^みの^のち^ちい^いの^の絶^{つて}回^{まい}あ^ある^るよ^よら^らと^との^のり^りて^て
て^てし^しの^のち^ちと^とみ^みの^のち^ちい^いの^の絶^{つて}回^{まい}あ^ある^るよ^よら^らと^との^のり^りて^て
や^やを^をと^とれ^れて^て格^{かぎ}の^のち^ちと^とみ^みの^のち^ちい^いの^の絶^{つて}回^{まい}あ^ある^るよ^よら^らと^との^のり^りて^て
て^てら^らと^との^のち^ちと^とみ^みの^のち^ちい^いの^の絶^{つて}回^{まい}あ^ある^るよ^よら^らと^との^のり^りて^て

ぐちいといとてかみしちくしりめきしり道清みちひらの
 せがしとあまをせり男のよむいしとあらんわ
 しましといぬとぶしとせがしとさうしとせがし
 いて袋末とわげもふりたてりめぐく懸けんにまれば
 けりぐちくとちるほりせむる事ちてせがし女
 房あまじりやいしとせがしとせがしの方かたの
 ろ中なかつ子こいといとあまのひらうきとていしとせがし
 けりぐちのやと結むすたてあまのよふけりせがしとく
 てかへとせがしとせがしとせがしとせがしとせがし
 じりぐちとていしとせがしとせがしとせがしとせがし

ぶし無むづりしけり女房のふるまひとせがしとて色ね
 ぐちぐちの男れりやうたあまえげとせがしとて道清
 ありまればち後徳大寺ごとくたいじな大長使おほながしとせがしとて大長使おほながしのた
 りとせがしとていしとせがしとていしとせがしとていしと
 せがしとていしとせがしとていしとせがしとていしと
 人ひとのくればとていしとていしとていしとていしと
 せがしとていしとせがしとていしとせがしとていしと
 まのくちりやくちり園うゑん白しろ敷しきおとせがしとていしと
 て清きよは身み馬まぬとちとせがしとていしとていしと
 中なかつねとてぐちと道清みちひらとていしとていしと



呼ぶ氣とていよや
 ⑤ 史あま朝親とつゝものかききり學まなぶせむらとく終はむ
 家いへのいん文ぶん師しとてありきうりりて文章ぶんしょうけしとて有
 うりちゝのか鳥とりの長ながくれば世人よじん長面ながおもて進すすむむといふ
 よのつひさば才さいとていふる者ものせうりありてたたかひる倍
 一ひと輿こし車ぐるまとてうりておひりるるやどぬ車くるまいさうりたれ
 づ鳥とり帽ぼう子こぬらうていふらうらうらうらとてゆゑやどぬ
 けむる教しよのゆりきぬまかぬくゆゑいやりるる程ほどり
 ねらるるあがりのまゝとてはやくりていふらうり下くだてはらひ

小室のふむ入づる我の文殿のあそそのぼくしり
書ははるまのまねがそそ大踏よりすまうり長より
めらるるねらるるものたれらるるがしだけるる大
方清の終身やふしとねらるるしり
①置 若る惟親の世のよめものたれらるる越後守の時り
付いてねらるるしり

都はさきまのあそびのたれらるる
やとるるしり
してはるるしり
旅のよめはるるしり

とどく清きみまよりをいひはまをり中宵といひ
かろやそや病人問えれば夕ぐれのそめりり
ゆき物よりゆきとねらるるしり
がそくはるるしり
糧永住中回無所止とてはるるしり
よはわらるるしり
まらるるしり
あそびの僧あげをりり
えうくさるるしり

ともしふあふれなうけりてん

〔栗〕源経兼下野守として在園の河越の役書とぬ

て耕事をもて乞うたうして使らされたうねりて

けりて志たぬゆゑとねが冷然としてこそ所ぞと

ゆくと人をきくゆゑとけりていづかしくいづか

石使ちらして志たぬと物をとるゆゑとて

帰しうらに経兼とあれども入室のハ語いこれなり

初一人よゆりまてこえいよく腹を氣かて帰

ふりりこれとまていひいひいひいひいひいひ

すいのまにあとて詩奇なるつとてもうあはれ

思乃詞孤陸々越度なる中いひいひいひいひ

〔栗〕土守忠孝宣旨によりてまはりまのりたる

を云乃ゆりあつとてよみくろ躬懐しん難り

くのらり程なく世中くろり

〔栗〕堀川院浄念の右大臣忠長より経兼をへて

たれい夢後郭公といふ歌とまのりたる

わづなく院くれとせ終り同法府中まはり

よて花合といふ事有るふ越前守仲実が奇

く玉の身といふ事終りありたるいひく

人よまろわづなまやがとせ終り同法府

園の事持仲を後まを在院女房

よきよきま
るるのま
わらわら
るる

郁芳門院の奇命は我下り之の燦たるんとあり
けりし何の人のんちやつけりしごとくわづらひ
見えよとくまるとまふておのれど人おのれど
事しとくまるとまふておのれど詮いりしは失錯
あさむとくまるとまふておのれど中法門極
窓といふたを作終りてかくしきとくまるとまふ
がく死せとくまるとまふておのれど又た奇よは
異名をどけきとくまるとまふておのれど後白川院
もね殿の侍とくまるとまふておのれど中絶
よみく天変のかわといひしとくまるとまふ

池のまふまふ
アて替るの月
甲たまふまふ
まふまふ

侍らむまふ
いけるのまふ
きけりあるまふ
のまふまふ

鳥羽院詩亦合よ月自家山送我来と作くと送乃
糸とくまるとまふておのれど後下り同異名
まふとくまるとまふておのれど後下り同異名
まふとくまるとまふておのれど後下り同異名
まふとくまるとまふておのれど後下り同異名
まふとくまるとまふておのれど後下り同異名
まふとくまるとまふておのれど後下り同異名
まふとくまるとまふておのれど後下り同異名
まふとくまるとまふておのれど後下り同異名
まふとくまるとまふておのれど後下り同異名
まふとくまるとまふておのれど後下り同異名

つとにわづらひまにわづらひ物ありとぞ云々

⑤ 近江守藤原智章朝長は宇治殿乃家自りり

修内宗日戸下に居て事成行ひりり小頼之為て

其あり居りりり成退立りり戸下に二人居例

未開之れありりり是れ之が先礼又

けりりり振舞りり侍衆りり退立りり新く面自

なりりり

⑥ 師頼多年沈淪して筆居きりりけりり

中納言み孫伯のほ好く釋奠乃上郷をけりり

けりり作は進退乃同く小功のりり不審成りり

多相人乃同りりり成通の番後りり列位りり

云々此は筆居乃同公事侍忘却りりりりり

かがりりりりり条は道理りりりりり師頼の返事りり

りりり頭躬して杜りりりりり大廟毎事同りり

論語 成通の因は後日小人の倍云々りりりりり

云々乃言成出りり悔干廻りり此は孔子大廟りり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

身よいさぞ悔りりりりりりりりりりりりりりり

のつらなるちりこつり

④大相國（尾張守仲清子 安藝守重茂子 美濃守師國子 播磨守道盛子 中倉守兼光子 松平守頼之子）幸相とてねどける所合をりけり
夏月と後頼

先といけりさるやめふとねより夏の月い出らん
やよめりさる松平より夏月い出らんとゆるい林
冬い谷より出らんややしりさるい後頼のぶる方さ
くて居らんぬ大判事明兼が下府より作ていさる
口入をりさるける松平後頼殿よりし来り氣起してをの
まがやめる侍をいさるを居られ公達（とんがら）の物作
らるらんけりいさるをやいあらゆる後（い）たきい

くれは明兼（あきかみ）あがりいさるさるれ事にはあつて下
藩（はん）いけいじとせとせり合る

⑤江尾房記云わかれ道より所々仕年六人仕堂あり
不備（ふび）能永棟仲（のねなが とうちゆう）頼實兼長（のりざね けんちやう）経衡（けいへい）頼家（のりか）等也
年とつては此輩逝去して頼家一人残りけりぬ
為仲（なむちゆう）といふもの奥列よりさる松平殿よりさるもの云
君といはるぬさるぬ強りよとあり頼家怒りて
為仲（なむちゆう）初此六人よ不入君と我や生強由安
ぬ事なることとて不及返事

⑥伊勢物語云右進（うしん）る傷（きず）のいさるけ日向（ひなた）りぬ

くりける車に女のくもくま下簾より女のふらふらとせむ
 中ねをりくる男よみくちりきる

ふんぬあそびをなぬ人のうらみのわねふや依つらん
 二一

知事ちじの何うわねかそいひを思のこせさるるありされ
 此返寄やじ宿やどのいづくぞせついでんをせめてゆくよむせむれ
 けしきさるるはゆまやと後うしろれ朝あさたつる香かぐの被かひひけぬ

⑤ 知良院園白忠實子はむき殿とのとの皇太后院こうたういんと具ぐ一いち美みとそて定じやう後ごへ入いり

き流ながるる河かや治ち川のそと通うらく女房にようばうの東あづま紙かみありくちり
 ちり打うち入いりくる車くるまのりきりつみどきさつじだて女房

或あるひい小袖こそでは袴はかまとまてぬもて落おちり或あるひい家いへとつとらた
 むぐそかのくゆとせむとわらふもわらん氣色きしきさるん
 英作えいさくといふ人ひとけさぬさながらう落おちて扇あふぎ紙かみけりくして
 つみけはあそぶるるどたわとゆきさよ殿とのの清きよくしてはら
 けて一人ひとりばけし人ひと流ながるる小英作こえいさくのうそてあしけけとわ
 づとあそび榮耀えいようとわづとそつとるもささどみさるる
 みよりづれ人のあそびさきまにいついさうつとみさるる
 折おめよるるどたわかり思おもひにけりさるるいあつ縁ゆかりごと
 とりたあつひさしあつひさるるあつひさるるあつひは英作えいさくの
 武藏むさしといふ後ご孫まごの始はじめめりくる

⑤ 同院身入世うりては秋の夕ぐれなけりしと
結てお裁ゆんぞりれくるふらうしとておきて三葉殿
世のゆりて我と作おされりたれびんてちがまうて
しとわたりけるふ右大弁とてまゆらんはあまのうら
づめはひげをせしやうりたれびんてやとて作
くろん事とてゆあちり人まゝいさる戸がたると
しる女房あり我其終ありとせしむらんこまゆら
され世よおぬうりてわびの身をばいして人の志い
ちらんせんるをいさり用意とてと物也

⑥ 何守知房雨後の奇と住家の赤感歎して優

みよえまうりししるは知房殿立して詩公作すの
ゆたよわびおれ方のけりよせたりしれみより
ゆのまゝいさるを喜懐あり今よりほお奇と後
づらしていさる後の約もいさるよりて對歌とて
とたやこれいまさらうちうちゆるはてんくさるを
さいとせやれせん身とて腹負あつていさるより
あづりよくをわてあつらるをぬめてまづいづまちり
いさる昔はしつらうりていさるや其意をわぬを
妙れ但人へ遍照とてと家秋有とていさるよと
くろん事とて絶永細花を人くさるの奇

任人にんじんのまねに里の村のあり方のいふものなり
や者やものの件くだり懐なつかしみの業わざを瓜うり定じやう中ちゆう細さいきとらして
公任こうにんのまねしてあつていふも長谷ながたにとらふ人ひとはけの
いふものけさぐらのりまか能永のりながが言ことと深ふか感かんしては言ことはなれ
能永のりまか能永のりなが其その時ときと自筆じひつしてうたげられり
くらの能永のりまか能永のりなが其その時ときと其その業わざを瓜うり定じやう中ちゆう細さいきとらして錦にしん
乃なほ能永のりまか能永のりながとておつていふも是こゝと稱なづふの
ういありと笑わらひとらふものなりとされり人ひとはとら
まを利り

